

第26回

函館港イルミネーション映画祭

第24回シナリオ大賞

函館市長賞〔グランプリ〕

2020

JOE

ジョーせんりをはす

—千里を馳す—

石村えりこ

元禄元年1664AD 七月十七日 相模六月十四日 日本

新 島 襄

—外渡航

英 船 之 先

昭和三十一年 七月二日 建立 田 五 社
1952 AD 同志社



【作者プロフィール】

いしむら えりこ

福島県出身。東京都在住

受賞歴は「第31回城戸賞」準入賞、「函館港イルミナシ
オン映画祭第11回シナリオ大賞」準グランプリ、「同第
23回シナリオ大賞」あがた森魚賞ほか

【あらすじ】

元治元年（一八六四）初夏。安中藩士・新島七五三しめ太たは、名高い武田斐三郎あやせさくろうの塾に入るべく、江戸から箱館へやってくる。しかし、武田はすでに江戸へ去った後で、塾は閉鎖と決まっていた。

落ち込む新島に、武田塾の塾頭・菅沼精一郎は、ロシア領事館付の司祭・ニコライを紹介する。新島はニコライの日本語教師として領事館に住み込むこととなる。

新島は、眼病治療のためロシア病院を訪れ、その充実ぶりに衝撃を受ける。また、五稜郭を見学し、新しい築城術にも驚く。新島はついに、秘めていた大志を菅沼に打ち明ける。自分は外国へ行って直接新しい文明を学びたいのだと。

しかし、海外への渡航は禁じられており、発覚した場合は死刑を免れない。

菅沼と、菅沼の親友で神明社の宮司・沢辺数馬は、思いとどまるよう新島を説得する。しかし、新島の覚悟は揺るがず、その熱意を知った二人は、逆に密航の手助けをすることを決意する。

ポーター商会に勤める富士卯之吉は、新島に接し、新島には何か特別な役目があると感じていた。英語が堪能で人脈もある卯之吉は、新島から依頼を受けるや、自らの危険も顧みず、密航計画を主導。アメリカ船・ベルリン号の船長に、乗船の許可を得る。

決行は六月十四日夜。新島は、菅沼や沢辺の協力を得ながら、祭礼で賑わう町を抜け、卯之吉が漕ぐ小舟でベルリン号へと向かう。「男児志を決して千里を馳す」。これが、後に新島襄じょうとなる若者の、新天地への旅立ちだった。

【登場人物】

新島七五三太^{しめだ}(21) 安中藩士

福士卯之吉(26)(16) ポーター商会の従業員

菅沼精一郎(27) 武田塾の塾頭・長岡藩士

沢辺数馬(29) 神明社の宮司・元土佐藩士

ニコライ(28) ロシア領事館付の司祭

おとき(18) 料理屋「筆屋」の女給

セイヴオリー 米国船ベルリン号の船長

テイラー 米国船ワイルド・ローヴァー号の船長

見張りの役人

武田塾の塾生 1・2

ロシア病院の医師

○箱館港

数多くの船が泊まっている。

沖合には外国船の姿も見える。

テロップ「元治元年（一八六四）四月」

○沖合

出航した船が進んでいく。

○箱館港

菅沼精一郎（27）ら、武田塾の塾生たち数名が出航した船に手を振っている。

菅沼「先生ー！」

塾生1「武田先生ー！」

塾生2「お達者でー！」

菅沼、遠のく船に向かい、深々とお

辞儀をする。

少し離れた場所で、町人姿の福士卯

之吉（26）が、帳面に何やら筆を走

らせている。卯之吉、ふと顔を上げる。

卯之吉「いい風だ……」

○がぎゆうせん臥牛山（箱館山）

夏空の下、濃い緑に覆われている。

○武田塾・外観

臥牛山の裾、もといざか基坂上方に立つ校舎。

○同・講義室・中

菅沼と塾生1が部屋を片付けている。

塾生1「江戸まではどのくらいかかるんで

しょう？」

菅沼「さあ、天候にもよるだろうが、卯之さんの見立てでは、そう海が荒れることはないらしい。存外早く着くかも知れんな」

塾生2が顔を出す。

塾生2「菅沼さん。外の看板、どうしますか？」

○同・門前

菅沼と塾生2が、「武田塾」と書かれた看板の前に立っている。

菅沼「名残惜しいが……」

菅沼、看板に手をかける。

新島の声「あの、すみません！」

菅沼と塾生2、振り向く。

旅姿の若い武士・新島七五三太（21）

が現れる。

新島「武田斐三郎あやせぶろう先生の塾はこちらでしょ

うか？」

菅沼「はい。しかし……」

新島「よかった！ 私は安中藩士あんなか、新島

七五三太と申します。入塾を希望して、

江戸から参りました！」

新島、目を輝かせている。

新島「ぜひ武田先生にお目通りを！」

菅沼「……！」

塾生2「先生はもうおられませんか。塾は閉

鎖です」

新島「！」

新島、気を失って倒れ込む。

菅沼「おい、君！」

○同・講義室・中

新島が沈んだ表情で座っている。

菅沼が入ってきて、新島の向かいに座る。

菅沼「あらためまして、塾頭の菅沼精一郎

です」

新島、軽く頭を下げる。

菅沼「先ほどお伝えしたとおり、武田先生は開成所の教授に任ぜられて、数日前に江戸へ発たれました」

新島「行き違いだなんて……」

菅沼「まだ数人、後始末のために残っていますが、片付けが済み次第、皆、箱館を離れる予定です」

新島「そうですか……」

新島、うなだれる。

菅沼「申し訳ないが」

新島、小さく首を横に振る。

○同・門前

新島が帰るところ。がっくりと肩を落としている。

見送る菅沼、見かねて、

菅沼「新島君」

新島、うつろな表情で振り返る。

菅沼「君は、武田塾で何を学びたいとお考えでしたか？」

新島「え？」

菅沼「ここでは、航海術や測量術、それから天文学、兵学、英語などを教えていました。特に興味がおりなのは何ですか？」

新島、きちんと向き直る。

新島、何度も頭を下げる。

新島「西洋の技術全般に興味があります。

菅沼「(慌てて) いや、まだ決まったわけで

しかし何より、私は、それらを生み育てた、

は……」

彼らの生き方、考え方の根本について知

新島、目を輝かせている。

りたいと思っています」

菅沼「ほう……。なかなか面白いお人だ」

○箱館港

新島「そのために、まずは英語を学びたい
です」

新島、晴れ晴れした表情で海に向か
い、深呼吸する。

菅沼「英語か……。わかりました。私も少し、

照りつける太陽。

君の受け入れ先をあたってみましょう」

新島、眩しげに目をこする。

新島「えっ！」

英語の会話が聞こえてくる。

菅沼「せっかく勉強を志して箱館まで来ら

新島、はっとして振り向く。

れたのでしょう？ 私も微力ながら、お

卯之吉が、荷車の前で外国人(英国人・

役に立ちたい」

ポーター)と英語で会話をしている。

新島「菅沼さん！ ありがとうございますま

驚く新島。

す！」

話が済み、ポーターが去っていく。

新島、卯之吉に駆け寄る。

新島「すみません！」

卯之吉「はい」

新島「今話していたのは英語ですよね？」

卯之吉「はい」

新島「どちらで学ばれたんですか？ やは

り武田塾でしようか？」

卯之吉、吹き出す。

卯之吉「まさか。そんな身分じゃありません。

独学です」

新島「ええっ！」

卯之吉「見様見真似でね。数年経ちや、誰

でも話せるようになります」

新島「すごいな……。あの、私にぜひその

勉強法を教えてくださいませんか」

卯之吉「えっ？」

新島「お願いします！」

新島、頭を下げる。

卯之吉、笑って、

卯之吉「いいですよ。あっしでよけりや」

新島「ありがとうございます！」

卯之吉「ですが、あっしは取引でしばらく

箱館を留守にするんです。その後でなら」

新島「もちろんです。私は、安中藩士、新

島七五三太と申します。宿はすぐその、

讃岐屋という旅籠です」

卯之吉「わかりました。あっしの名は卯之吉。

ポーター商会って店にあります。さつき

のお人が、雇い主のポーターさん。じゃあ、

ちよつと急ぎますんで。帰ったらお知らせ

せします」

卯之吉、荷車を引いて去っていく。

新島、感心した様子で、

新島「これが箱館か……」

○旅籠「讃岐屋」・外観

○同・玄関・中

菅沼が立っている。

中から新島が現れる。

新島「菅沼さん！」

菅沼「やあ。君の受け入れ先が見つかりま

したよ」

新島「本当ですか？」

菅沼「ところで、飯はもう済みましたか？」

新島「いえ、まだです」

菅沼「じゃあ、先に腹ごしらえをしましょう」

○大通り

新島と菅沼が連れ立って歩いている。

新島、珍しそうに辺りを見回す。

新島「賑やかですね」

菅沼「ええ。箱館は昔から漁業で栄えた港

でしたが、十年前にペルリがやってきて

から、大きく変わったそうです。各国の

領事館が建ち、外国人も次々にやってき

ました」

ちょうど、西洋人の紳士とすれ違う。

新島、振り返ってその姿を眺める。

菅沼「大っぴらに外国の文化を学べるのは、

長崎と、ここ箱館くらいでしょう。新島

君は、江戸でしたね」

新島「はい。ずっと江戸詰めです。安中藩

の江戸屋敷に。菅沼さんは？」

菅沼「私は越後の長岡です。しかし、雪に慣れた私でも、蝦夷地の冬の寒さはこたえます。(笑って)君は一番いい季節に来ましたよ。でも、冬は覚悟しておいてください」

新島「あ、はい……」

新島、曖昧な笑みを浮かべる。

○料理屋「筆屋」・外観

○同・中

菅沼、続いて新島が入ってくる。

給仕をしていたおとき(18)が二人に気づき、

おとき「菅沼さん！ いらっしやい。どうぞどうぞぞ」

菅沼と新島、空いている席に座る。

おとき「こちらは新しい塾生さん？」

菅沼「いや、残念ながら一足違いでね。でも、箱館で勉強を続けてくれるそうだよ」

新島「新島です。よろしく」

おとき「どうぞごひいきに。すぐお膳をお持ちしますね」

おとき、奥の調理場に消える。

菅沼「さて、君の行き先ですが、先方は住み込みでいいと言ってくれています」

新島「ありがたいです。宿代もばかになりませんから」

菅沼「そうですよね」

新島「あの、英語は学ばせてもらえるんでしょうか」

菅沼「もちろんです。英語を教えられる外

国人を紹介してくれるそうですよ」

おとき、お膳を二つ運んでくる。

おとき「お待ちどうさま」

ご飯、味噌汁、焼き魚。さらに、椀

が一つ余分についている。

菅沼「今日のは？」

おとき「ポテイトのソップです。お芋の一

種ですって。鶏のだしで煮てみました」

菅沼「どれ」

菅沼、ポテトスープを一口すすする。

菅沼「うん。まあまあかな」

おとき「よかった！（新島に）新作の料理

は、いつも武田塾の方々に味見してもら

うんですよ」

新島も一口。

新島「あ。うまい」

菅沼「この芋も、卯之さんの仕入れかな」

おとき「そうです。でも、卯之兄ちゃんたら、

また留守にしているんですよ。今度は、昆

布の買い付けですって」

新島、はつとする。

おとき「このソップ、そのうち献立に出し

ます。じゃあ、ごゆっくり」

おとき、調理場に消える。

菅沼「さ、いただきますしよう」

菅沼と新島、箸をとる。

新島「あの……、卯之さんとは、もしや卯

之吉さんのことですか？ ポーター商会

の」

菅沼「新島君、知っているんですか？」

新島「いえ、知り合いというわけではあり

ません。先日、港で英語を話している人

がいて、驚いて」

菅沼「ああ、卯之さんは英語も達者です。今の娘はおときといつて、卯之さんとは縁続きだそうです」

新島、食べながらふんふんとうなずく。

菅沼「ところで話は戻りますが、どうです、

先方に会ってみませんか？」

新島「はい、喜んで」

菅沼「ただし、条件が一つ。君もその方の先生になつてください」

新島「私が？ 私に教えられることなど、あるでしょうか」

菅沼「心配いりません。君が教えるのは日本語ですから」

新島「日本語……？」

○ロシア領事館・外観

瀟洒な洋館。ロシア国旗が掲げられている。

テロップ「ロシア領事館」。

○同・玄関・中

菅沼と新島が立っている。

あつけにとられている新島。目をごしごしこする。

二人を出迎えているのは、ロシア人のニコライ(28)である。

菅沼「こちらは、ロシア領事館付の司祭、ニコライさんです」

ニコライ「はじめまして」

ニコライが笑顔で会釈する。

新島「は、はい。はじめまして」

菅沼「ニコライさんは、箱館にいらして何年になりますか」

ニコライ「三年、です」

菅沼「もうそんなに経ちますか。新島君、ニコライさんはこの通り、もう日常会話は十分こなせます。新島君にはこれから、日本の伝統や文化について、教えてもらいたいそうです」

新島「はい！ 承知しました！」

ニコライ「よろしく、お願いします」

新島「こちらこそ！」

新島、深々と頭を下げる。

○同・新島の部屋・前

ニコライが菅沼と新島を案内してくる。

ドアを開け、

ニコライ「こちらが、新島サンの、お部屋です」

小さな洋室。簡素なベッドと机が置かれていた。

新島「私が一人で使っているのですか？」

ニコライ「もちろんです」

新島「ありがとうございます！（振り返り）

菅沼さん、あなたのおかげです……」

新島、ポロポロと涙を流す。

菅沼「まあ、そう泣くほどのことでは」

新島「いえ、あの、目に痛みが……。涙が

止まらないんです」

新島、両手で目を覆う。

菅沼「新島君！ 大丈夫か？」

○ロシア病院・外観

テロップ「ロシア病院」。

ニコライ「炎症は、すぐ、治まります。薬を出します」

○同・診察室・中

ロシア人の医師が新島の目を診察している。充血した目。

そばで見守るニコライ。

医師がロシア語で何やら説明する。

ニコライ「強い日差しと、潮風に、あたっ

たせいだ、と言っています」

新島「はい。長い船旅でしたから」

医師がまた何か話す。

ニコライ「以前から、目の具合が、悪かつ

たのではないかと」

新島「そんなことまでわかるんですか？」

医師、ほほ笑む。

○同・待合室・中

新島とニコライが戻ってくる。

清潔で広々とした室内。日本人の患者が多い。粗末な衣服の者もいる。

ニコライ「この病院は、お金を、とりません」

新島「えっ」

ニコライ「貧しい者も、皆、等しく、治療を、

受けられます」

新島「なんと……!」

新島、窓の外に目をやる。

中庭は美しい花園になっている。

新島の目に涙があふれる。新島、慌

てて手ぬぐいで抑える。

○ロシア領事館・外観（夕）

新島「はい。……家で夜勉強すると叱られ

○同・新島の部屋・中（夕）

新島がベッドの上に座り、目薬を差している。

まして。蘭学なんぞやるのに、灯りの油がもつたいないと。それでずつと薄暗がりて本を読んでいたら、この有様です」

その横で、心配そうな菅沼。

新島、手ぬぐいをあてたままで苦笑する。

新島、両目を閉じ、その上に手ぬぐいをのせる。

菅沼「……」
菅沼、優しく見守る。

新島「おかげさまで、痛みが引きました」

菅沼「それはよかった。すぐにロシア病院

○ロシア領事館・中庭（朝）

の治療を受けられるとは、新島君は運が

手入れの行き届いた洋風の庭。

いい」

新島「立派な病院で驚きました」

○同・礼拝堂・中（朝）

菅沼「先ほど聞きましたが、新島君は、江

中央にイコンが飾られている。

戸にいた頃から目を患っていたんです

祈りを捧げているニコライ。

か？」

○同・食堂・中（朝）

新島がニコライと向かい合つて座り、

ニコライがドアを開ける。

『古事記』の講義をしている。

目を充血させた新島が入ってくる。

新島「イザナギとイザナミが、ともに天上

新島、驚きの表情。

の橋に立ち、矛を地に降ろしました。そ

テーブルの上には美しいティーセット

の矛を引き上げる時、雫がしたたり落ち、

トが並び、紅茶、ジャム、パンケーキ

島を成しました」

キなどが用意されている。

ニコライ、頷きながら真剣に聞いて

ニコライ「新島サン。朝食を、いただきま

いる。

しょう」

新島「は、はい！」

× × ×

○同・中庭

礼拝堂の鐘の音が聞こえている。

新島「アマテラスは、どうしても外の様子

を知りたくて、岩の戸をかすかに開けま

○同・食堂・中

食事は片付けられている。

新島、講義に熱が入り、身振り手振

しりした腕につかまえられ……」

りを交えて話している。

新島が沢辺に應對している。

新島「ニコライさんは今、お留守ですが」

沢辺、新島をジロリと見て、

○同・新島の部屋・中（夜）

目薬をさす新島。目の充血はとれてきている。

沢辺「夷狄いてきなんぞに用はない！ 江戸から来た若造つちゆうんはおまんかえ？」

新島、窓際に立ち、じっと海のほう

新島「失敬な。私に何か？」

を見つめる。

沢辺「ちいと表に出んかえ」

沢辺、あごでしゃくって促す。

○海（夜）

暗い海。波が荒れてきている。

○同・中庭

沢辺と新島が対峙している。

○ロシア領事館・外

憤怒の形相をした武士が一人、やつ

沢辺「おまん、夷狄に我が国の文化について教えちよるそうじゃのう」

てくる。沢辺数馬（29）である。

新島「はい」

○同・玄関先

沢辺「どういうこっちゃ！ 奴等はこの国をのつとるつもりぜよ。おまんは売国奴

か！ 返答によつては……」

沢辺、刀の鯉口を切る。

どきりとする新島。ぐつとこぶしを握る。

新島「あ、あなたは、何を根拠にそう考えるのですか？」

沢辺「根拠だあ？ ニコライは切支丹の邪

宗を広めようと目論んじよる。ニコライ

こそ、禍わざわいの元じゃ！」

新島「あなたは、切支丹の教えを知つているのですか？」

沢辺「そんなもん、知るか！」

新島「何も知らないのに、なぜ邪宗だとわかるのですか？」

沢辺「む……」

新島「相手の国を知り、我が国のことも知

つてもらおう。それが我が国のためになるとは思いませんか？」

沢辺、刀から手を離し、新島をまじまじと見る。

新島「私はロシアが建てた病院へ行きました。そこでは、患者一人一人にカルテなるものを作り、薬を調合していました。しかも、経費はすべてロシアがまかなうのです。患者は皆、病院に感謝していました」

沢辺「それが奴等の狙いじゃろうが！ 箱館の住民たちをロシアになびかせ、日本から奪おうつちゅう魂胆じゃ」

新島「ではなぜ、日本はそれを防げないのですか！ 病院は粗末で、薬も効かない。貧しい者は治療すら受けられない。卑し

い役人と藪医者だけが金を得る。施しようなどと考えもしない。ロシアにできることが、なぜ日本にはできないのですか？」

沢辺「うーん」

新島「私は、ロシアを褒めているではありません。齒がゆいのです。私は、この日本国のために何ができるか、それだけを常に考えています」

沢辺「……」

沢辺、不意に笑い出す。

沢辺「いや、すまんすまん。ちいとおまんを試してみたんじゃ」

新島「は？」

沢辺「菅沼はクソ真面目で人がよすぎるき、怪しい奴に騙されちよるんじゃないか思

うてのう」

新島「菅沼さんをご存じなんですか？」

沢辺「ご存じも何も、菅沼はわしの親友じゃ」

新島「えーっ」

新島、胡散臭そうに沢辺を見る。

新島「てつきり、『天誅』かと……」

沢辺「(笑って) わしや、むやみに人を斬ったりはせん」

新島、大きく安堵のため息をつき、その場にへたり込む。

沢辺「日本国のため、か。おまん、なかなか骨のある奴じやのう」

沢辺、手を貸して新島を立ち上げさせる。

沢辺「わしや、気に入ったぜよ。名は？」

新島「新島七五三太です」

沢辺「七五三太か。わしゃ、沢辺数馬っち

ゆう者じゃ。神明社いう神社で宮司をし

ちよる」

新島「えっ……神社の宮司？」

新島、また胡散臭そうに沢辺を見る。

沢辺「ま、婿養子に入る前は、土佐の脱藩

浪士じゃったがの」

新島「土佐のお方ですか」

沢辺「箱館に来る前は、江戸にもおったぜよ。

今度はわしんとこで、江戸の話でもせん

かえ」

新島「は、はい」

沢辺、笑いながら何度も新島の肩を

たたく。

○基坂

新島と菅沼が歩いている。

新島「私はてつきり、異人斬りの不逞浪士

かと思いましたが」

菅沼、笑って、

菅沼「確かに、沢辺さんは攘夷論者です。

剣の腕もたつ。稽古場を持っているくら

いですから。でも、とても気のいい人で

すよ」

新島「はあ……」

菅沼「ところで、塾の片づけも済みました

ので、私も近々、箱館を離れるつもりです」

新島「えっ。菅沼さんも江戸へ行かれるん

ですか」

菅沼「いや、国元の長岡へ帰ります」

新島「そうなんですか……寂しいです」

菅沼「その前に、新島君に見せたいものがあります。付き合ってもらえますか？」

○五稜郭・全景

テロップ「五稜郭」

○五稜郭・正門付近

六尺棒を持った門番が立っている。

大きな堀や石垣が見える。

新島と菅沼が歩いてくる。

菅沼「これが、武田先生が設計された西洋

式の城郭、『五稜郭』です」

新島「わあ……」

菅沼「着工から七年かかって、ようやく先

月完成したばかりです」

新島「大きいですねえ」

菅沼「そうでしょうか？　しかし、本当はもっと大きいはずだったのです。予算が削られて、だいぶ縮小されました」

菅沼、設計図を見せながら、

菅沼「城郭は、この五つの張り出しが大きな特徴です。これは死角を生まない効果があります」

新島、感心したようにうなづく。

菅沼「もう少し先に行ってみましょう」

○同・箱館奉行所新館・外

新しい奉行所の建物。少し離れたと

ころに、菅沼と新島が立っている。

菅沼「来月からは、ここで奉行所の政務の

一部が開始されます」

新島「でも、ここは町の中心からはだいぶ

離れていますね」

菅沼「はい。現在の奉行所は、武田塾のすぐそばにあります。坂の上で、見晴らしもいい。しかし、もし湾内から外国の軍艦が攻撃してきたら、どうなりますか？」

新島「あ！ すぐに標的にされてしまいます。港から近過ぎて、砲撃されたらひとたまりもありません」

菅沼「その通りです。そこで、一里ほど離れた、ここ亀田村へ移転することになったわけです」

○同・堀端

低い土塁に、菅沼と新島が並んで座っている。

菅沼「今日は、ここを見てもらえてよかつ

たです。新島君は、武田先生から直接教えを受けられませんでしたから、せめて、先生のお仕事の一端でも紹介したいと思っていました」

新島「菅沼さん……」

菅沼「武田先生は、オランダ語の築城書を片手に、フランス人の助言を受けながら、この五稜郭を設計されました。先生のように、古いやり方にとらわれず、新しい文明や知識を学ぶことは、今後益々重要になります。私は、それを君に伝えたかったのです」

菅沼、ほほ笑む。

新島「ありがとうございます」

新島、頭を下げる。

菅沼、設計図を開く。

菅沼「それにしても残念なのは、この五稜郭は大き過ぎて、地上では全貌を見ることができないということです」

空を一羽の鳥が舞っている。

菅沼「もし私に翼があったら、一度、五稜郭を空から眺めてみたいものです。どんなに美しい形をしていることか」

新島「……」

菅沼と新島、飛んでいく鳥をじっと見送る。

新島「もし私に翼があったら……」

菅沼「ん？」

新島「翼があったら、私は、千里を馳せ、遠く海を渡っていききたい」

菅沼、新島を見る。新島も向き直る。

新島「私は、外国へ行つて、直接新しい文

明を学びたいのです！」

菅沼「……！」

○料理屋「筆屋」・外

おとぎが打ち水をしている。

肩を落とした新島が通り過ぎる。

おとぎ「あら、新島さん」

新島「(うつろに) ああ」

おとぎ「どうかしたんですか？」

新島「いえ。……私は、菅沼さんを怒らせてしまったかも知れない」

おとぎ「え？」

新島、足早に去っていく。

いぶかしげに見送るおとぎ。

○同・中

社」。

おときが首をかしげなら入ってくる。

食事を終えた卯之吉が、帰り支度を
している。

卯之吉「ごちそうさん」

おとき「あら、もつとゆっくりしていけば？

戻ったばかりなのに」

卯之吉「いや、これから沢辺さんのところ
に寄るから」

卯之吉、そばの風呂敷包みを掲げる。

おとき「沢辺さん？　じゃあ、ちよつと待
って」

おとき、調理場へ消える。

○同・沢辺の道場・外

裏手にある、別棟の小さな稽古場。

○同・中

沢辺と卯之吉が座っている。沢辺の
前には、上質の昆布、ニシン、干し
アワビ、スルメなどが広げられてい
る。

沢辺、昆布を手にとり、においをかぐ。

沢辺「卯之吉。こんな上物、夷狄に売るな
んぞ、勿体ないとは思わんかえ」

卯之吉「まあまあ。沢辺さんにはこうして、
選りすぐりを届けているじゃないですか。

あ、そうそう、これはおときからです」

○神明社・外

立派な構えの神社。テロップ「神明

卯之吉、小さな包みを開ける。中は不格好な黒パンである。

沢辺「何じゃ、こりゃ？」

卯之吉「パンを焼いたそうです」

沢辺、一口かじり、顔をしかめる。

沢辺「まずい！ こんな乾いた饅頭みたいなもん、食えるか！」

沢辺、口元をぬぐう。

沢辺「おときもなあ、こんなことばっかりしちよったら、嫁のもらい手がのうなるぜよ」

卯之吉「いいんですよ。てんでその気がないから。嫁には行かず、西洋料理の修業をしたいと思います」

沢辺「けんど、（パンを指して）こいつはいかんぜよ。もっとうこう、なんちゅうか、

ふつくらとはならんかえ」

卯之吉「伝えておきます。うまく焼けたら、きつと菅沼さんに食べてもらおうつもりでしようから」

沢辺「何じゃ。ほいたら、わしや、毒見役か？」
卯之吉、笑う。

○ロシア領事館・外観（夕）

○同・礼拝堂・中（夕）

新島が一人、席に座っている。

ニコライがやってくる。

ニコライ「何か、ありましたか」

新島、小さくうなづく。

新島「こんなによくしていただいたのに、心苦しいのですが……。私はもう、自分

を偽ることができなくなりました」

ニコライ「話してみても、ください」

新島「私は、外国へ行って学びたいのです」

ニコライ「！」

新島「この目で、この耳で、直に新しい世界にふれてみたい。箱館に来て、一層その思いが強くなりました」

ニコライ、考え込む様子。

新島「この港には、たくさん外国船がやってきます。何とか、そのうちの一つに、乗り込むことはできないでしょうか」

ニコライ「それは、できません。外国へ行くのは、日本の法律で、禁じられています」

新島「法に触れることはわかっています。

それでも、私はどうしても行きたい。助けていただけませんか？」

ニコライ、首を横に振る。

ニコライ「お気持ちちは、わかりますが、私は、反対です。助けることは、できません」

新島「しかし、ニコライさんだって、志を持って、祖国からはるばる日本へいらしたのでしょうか？」

ニコライ「私は、司祭として、正式に日本へ、派遣されました。密航では、ありません。密航は、危険です。あなたを、危険な目に、遭わせたく、ありません」

新島、うなだれる。

ニコライ「では、私も、打ち明けます。今、キリスト教は、禁じられています。しかし、許されたら、私は、布教活動を、始めるつもりです。あなたは、ここにおいて、私を、助けて、くれませんか？」

新島「えっ……」

ニコライ「あなたは、とても、優秀です。

この箱館にいても、英語を学ぶことは、
できます。私が、聖書のこと、教えま
しょう。

考えてみて、ください」

新島「……」

○新島の部屋・中(夜)

新島、窓の外を見つめている。

○(回想) 五稜郭・堀端

新島と菅沼が座っている。

菅沼「……君は、嘘をついていたのですか？」

新島「えっ」

菅沼「箱館に来たのは、武田塾で学ぶのが

目的ではなかったのですね」

新島、慌てて、

新島「違います！ 武田塾で英語を学びた
かったのは本当です。入塾した後に、私
の志を武田先生にご相談するつもりでし
た」

菅沼「外国へ渡ることは、国禁を犯す大罪
です。もし発覚したら、君だけじゃない、
武田先生にまで罣が及んでしまうかも知
れないのですよ」

新島「それは……」

菅沼「密航など、軽々しく口にするもので
はありません。私も、今の君の話は、聞
かなかったことにします」

菅沼、立ち上がり、歩き出す。

○もとの新島の部屋・中（夜）

新島、ため息をつき、窓に額をつける。

○神社・外

○同・境内

沢辺が鍋を手にいそいそと歩いている。

新島がやってくる。

新島「沢辺さん」

沢辺「おう、七五三太！」

新島、お辞儀をする。

沢辺「おまん、ちょうどええところに来た

ぜよ。今、家の者は皆留守じゃき。わし

の稽古場へ行くぜよ」

沢辺、裏手へと向かう。

○同・沢辺の道場・中

沢辺と新島が座っている。

沢辺が鍋の蓋をとる。中はニシンの昆布巻きである。

沢辺「わしの嫁は料理上手でう。箱館の

おなご女子はええぞ、七五三太」

新島（小声で）今はそれどころじゃ……」

沢辺、昆布巻きを皿によそい、新島に渡す。自分のぶんも箸でつまみ、

沢辺「見てみい、このつやつやの昆布！

分厚いニシン！」

沢辺、口に入れて

沢辺「うまい！ ほれ、遠慮せん」と

新島「いただきます」

新島も昆布巻きをほおぼる。

新島「うん！ おいしいです」

沢辺「地元ならではの贅沢じゃき。こんな

うまいもんは、江戸でも食えん！」

新島「……沢辺さんは、どうして江戸から

箱館に来たんですか」

沢辺「ん？ ああ……腹を切れ、言われての」

新島、驚いてむせる。

沢辺「おい、大丈夫かえ？」

沢辺、湯飲みを差し出す。新島、白

湯を飲む。と、またむせて、

新島「これ、酒じゃないですか！」

沢辺「気にするなや。お神酒なら進物とし

て、たとあるんじゃないか」

新島「いえ、そういうことじゃなくて……」

沢辺、湯飲みで手酌をしながら、

沢辺「わしゃ、あさり河岸の土学館いう道

場におったがじゃ。知つちよるかえ？」

新島「はい。桃井春蔵もものいしゆんぞう先生の道場ですな」

沢辺「さよう。ある時、道で拾うた時計を、

質屋に持って行つたんじゃ。何しろ貧乏

じゃったき、つい魔がさしてのう……。

けんど、それがばれて、えらい騒ぎじゃ。

武士が盗みを働くとは何事じゃ、腹を切

れ、とこういうわけぜよ」

新島「それだけで切腹ですか？」

沢辺「土佐藩邸にまで知れたからのう。また、

塾頭の武市半平たけちはんぺいた太たいうのが、堅物でのう。

藩の面目に関わるとか何とか言うがじゃ」

新島「それで、どうなつたんですか？」

沢辺、ゆつくり酒を口に運ぶ。

沢辺「一人だけ、数馬に腹切らせるなんぞ

無益じゃ、言うてくれた者がおつての。

皆を説得して、逃がしてくれたんじゃ」

新島「へえ……」

沢辺「そいつはわしの従弟での、坂本龍馬、
いうがじゃ」

その後ろ姿をじっと見送る沢辺。

沢辺の声「わしや、あいつには頭が上がら
んぜよ」

○（回想）河岸（夜）

沢辺が、小舟に乗り込むところ。

見送りに来た男（龍馬）が、懐に手
を入れる。

○もとの沢辺の道場・中

沢辺と新島。

沢辺「それが七年前のことじゃ。それつき
り会うとらんが、どうしておるかのう」

沢辺の声「わしがひそかに江戸を発つ時、

龍馬は自分の財布をそっくり投げてよこ
した」

新島「坂本、龍馬さん、ですね」

沢辺「ああ。いつか、七五三太にも会わせ
たいのう。おまんと同じ、変わり者で、

龍馬が懐から取り出した財布を、舟
の上の沢辺に投げ与える。

面白い男じゃき」
新島、ほほ笑む。

沢辺、驚いた顔で受け取る。

龍馬、背を向けて去りながら、軽く

手を振る。

× × ×

鍋の中身はきれいに平らげられている。
る。

沢辺、かなり酔っている様子。

沢辺「ニシンも昆布もなあ、上物じゃき、
ここから北前船で、京都や大坂まで運ば
れるぜよ」

新島「はい」

沢辺「ほいで、もつとずーつと先、琉球王

国や清国にまで運ばれるらしいろ」

新島「外国へも？」

沢辺「ああ」

新島「(小声で)ニシンや昆布が外国まで運

ばれるのに……私は……」

沢辺「ん？」

新島「沢辺さん。私もきつと外国へ渡ります」

沢辺「はあ？」

新島「そして、学んだ知識を、必ずやこの
国のために生かします」

沢辺「おう。そうじゃ、ええぞお、七五三太！

男児たるもの、何かどでかいことをせん
といかん。その意気ぜよ！」

新島「はい！」

沢辺、豪快に笑う。

○ロシア領事館・外観(夕)

○同・礼拝堂・中(夕)

新島が一人座り、じつと目を閉じて
いる。

○神明社・境内

沢辺が木刀で素振りの稽古をしてい

る。

菅沼が急いだ様子でやってくる。

菅沼「沢辺さん！」

沢辺「おう、菅沼」

沢辺、手をとめて汗を拭く。

菅沼「あまり新島君をけしかけないでくだ

さい」

沢辺「は？ 何のことじゃ？」

菅沼、辺りを窺う。

菅沼「（小声で）外国へ渡るといふ話です」

沢辺「はあ？ ……ああ、何やらそんなこ

とを言うちよつた。七五三太は面白い奴

じゃのう。まあ、夢は大きく持たんな」

菅沼「夢じゃない、彼は本気ですよ」

沢辺「は？」

菅沼「沢辺さんのせいで、新島君はすつか

りその気になってしまいましたよ」

沢辺「はあ？」

○料理屋「筆屋」・外観

○同・二階の廊下

個室の前。おときが立っている。

沢辺が襖から顔を出す。

沢辺「誰も近づけちゃならんぞ」

おとき「はあ……」

沢辺、左右を向いて人がいないこと

を確かめ、襖をぴしゃりと閉める。

おとき、首をかしげながら階段を下

りていく。

○同・個室・中

八畳ほどの和室に、新島、菅沼、沢辺が座っている。

菅沼「新島君。何度も言うようだが、考え直したまえ。密航など危険すぎる。計画がお上に知れただけで、お咎めを受けてしまうぞ」

沢辺「以前、長州の吉田某なにがしいうんが密航に失敗して、獄に繋がれたらしいのう。これが土佐藩じやつたら、間違いのう、『腹切れ!』言われるぜよ」

新島「……」

菅沼「誰にも知られていないでしょうね」

新島「私とて、誰にでも打ち明けているわけではありません。この方なら信じられる、と見込んだ方だけです」

菅沼、沢辺、顔を見合わす。

新島「話したのは、菅沼さんと、沢辺さんと、あとはニコライさんだけです」

沢辺「何い、ニコライだあ?」

菅沼「まあ、ニコライさんなら大丈夫でしょう。役人に密告するような方ではない」

沢辺「七五三太。おまん、まさかニコライにそそのかされたんじゃないの?」

菅沼「何を言うんですか。たきつけたのは、沢辺さんでしょう?」

沢辺「はあ? 確かにわしや、日本国のために外国を知りたいうちゅう七五三太の話には納得したぜよ。けんど、今すぐ密航しろとまでは言うちやらん」

菅沼「酒に酔うといつも、『男児たるもの』とか始まるでしょう? きつとまたそう

やって、新島君を……」

新島「まあまあ、お二人とも、落ち着いてください」

新島が止めに入り、二人とも黙る。

菅沼、咳払いして、

菅沼「外国へ行く手立ては、全くないわけではありません。先年、幕府はオランダへ幕臣を留学生として派遣しています」

新島「はい、知っています」

菅沼「聞くところによると、彼らは手当として、一人当たり百六十両も受け取っているそうです」

沢辺「ひ、百六十両？ 七五三太。おまん、今いくら持ちちよる？」

新島「今は……二両ほどです」

沢辺「はあ？ たったの二両？」

菅沼「もし仮に密航できたとしても、幕府

はおろか、藩の後ろ盾もなく、金もなく、たった一人で、君はどうやって外国で学

ぶというのですか」

新島「……」

沢辺「英語もろくに話せんじゃろう？

ほいたら、学ぶどころか、下手すりゃ野垂れ死にぜよ」

新島「わかっています！」

新島、バンツと両手を畳につく。

新島「しかし、このまま、この閉ざされた国にいたら、私は死んでいるも同然です！」

驚く菅沼と沢辺。

新島「もう耐えられないのです……」

うつむく新島。

新島「……新島家は代々、安中藩の祐筆役を務めてきました。私は狭い執務室で、来る日も来る日も書類を写すだけです。世の中が大きく動いているのに、私は何もできない。辛くて、苦しくて……。あの日、とうとう床から起き上がれなくなりました。医者からは気の病だと言われました」

菅沼と沢辺、じつと聞いている。

新島「思い悩んでいた矢先、箱館行きの船があることを知りました。天の父は、私を見放さなかった。そう思いました」

沢辺「眉をひそめて」天の父「……？」

菅沼「それで、君のご両親は、乗船を許してくれましたか？」

新島「はい。むろん、外国へ行くという私

の決意は、誰にも告げずに来ました。でも、おそらく察してくれたはずですよ。家族とは、水盃を交わしてきました」

菅沼「今生の別れになるかも知れないと……」

新島「はい。実の両親との別れは辛いものですが、きっと天の父が導いてくださいます」

新島、懐から漢訳の聖書を取り出し、

菅沼と沢辺の前に置く。

呆気にとられる二人。

菅沼「聖書……！」

沢辺「アホか！ こんなご禁制の書なんぞ持つちよつたら、切腹どころか打ち首ぜよ！ 早うしまえ！ いや、わしが預かる！」

沢辺、慌てて聖書を懐に入れる。

新島「金もない、つてもない。無謀だとい

うことは、私が一番よくわかっています。

私の志は、私一人ではとうてい成就できません。ですからどうか、どうか、お力を貸してください！」

新島、深く頭を下げる。

菅沼・沢辺「……」

菅沼、立ち上がり、窓を開ける。

菅沼「……箱館に来る者で、外国に憧れな
い者がいるだろうか」

窓からは海が眺められる。沖合に外

国船が数隻浮かんでいる。

新島、顔を上げる。

菅沼「こうして、日々、新しい文明を目の
当たりにしているんだ。自分も海の向こ

うへ行ってみたい。そう思わないのがお
かしいくらいだ」

菅沼、窓を閉め、新島に向き直る。

菅沼「君が最初にその決意を話してくれた
時、私は、妥協して今の生活に甘んじて
いる、自分の心の奥底を見透かされたよ
うな気がした。それで動揺したのだと思
う」

新島「菅沼さん……」

菅沼「しかし君は、いろんな葛藤を、もう
乗り越えてしまった。その、天の父とい
う存在を知って」

沢辺「おいおい、菅沼」

菅沼、沢辺を制して、

菅沼「新島君。君に伝えていなかったこと
があります。あの五稜郭のことです」

新島「はい」

菅沼「五稜郭は西洋式の城郭ですが、いざ
実戦になったら、何の役にも立ちません」

新島「えっ」

沢辺「ええっ」

菅沼「設計から完成までは、七年かかった
と言いましたね。その間に、兵器の開発
も急速に進みました。あの距離ではもう、
海上から撃つ砲弾が、郭内にまで届いて
しまうのです」

新島「あんなに海から離れていてもです
か？」

菅沼、うなずく。

菅沼「むろん、武田先生はそれに気づかれ、
途中で設計の変更を願ひ出られました。
しかし、予算の都合で許可されなかった

のです」

沢辺「ほいたら、ありゃ張子の虎かえ」

菅沼「それを知るのは、ごく一部の者だけ
です。この間は言えなかった。申し訳ない」

菅沼、頭を下げる。

新島「いえ、そんな」

菅沼「西洋の技術は、日進月歩です。こう
している間にも日本はどんどん遅れをと
っている。君が最新の技術を学んでくる
ことは、国のため、大いに意義があります」

新島「では……」

菅沼、うなずく。

菅沼「もう引き留めることはしません。私
など、どれだけ力になれるかわからない
が、手助けしましょう」

沢辺「菅沼！ お人よしめ！ わしや、知

らんぜよ」

新島「ありがとうございます……!」

新島、感極まって泣き出す。

菅沼「(慌てて) 新島君! また目が痛むのか?」

新島、吹き出して、首を横に振る。

ほっとする菅沼。

菅沼「しかし、私にも金はない」

菅沼と新島、沢辺を見る。

沢辺「わ、わしも、金なんぞないぜよ!

……けんども、まあ、つてなら、ある」

新島「沢辺さん!」

沢辺「まあ、待て! ちつくと考えさせん

かえ。七五三太、わしが連絡するまで、

おまん、勝手に動くなや。絶対に他言無

用じゃ!」

新島「はい!」

沢辺、ため息をつく。

沢辺「やれやれ。まっこと知らんぜよ、わしやあ……」

○料理屋「筆屋」・外観(夜)

○同・中(夜)

客はまばら。

卯之吉が食事をしている。おときがその向かいに座り、頬杖をついている。

おとき「どうも怪しいんだよね……」

卯之吉「何が?」

おとき「昼間の三人。二階の部屋で、何か

こそこそと」

卯之吉「誰のことだい？」

おとき「菅沼さんと、沢辺さんと、新島さんだよ」

卯之吉、箸を止める。

卯之吉「……新島？」

おとき「先月江戸から来たお侍さん。武田塾に入れなくて、今、ニコライさんのところにいるんだって」

卯之吉「……」

卯之吉、笑い出す。

卯之吉「そうか、ニコライさんのところか。どおりで讃岐屋に行ってもいないわけだ」

おとき「あれ。卯之兄ちゃん、知ってるの？」

卯之吉「いや、知らん。今はまだ、な」

卯之吉、食事を続ける。

○神明社・境内

本殿の裏手に、菅沼と沢辺が座っている。

菅沼「新島君には不思議な力がある。そう
思いませんか？」

沢辺「ん？」

菅沼「いつも一生懸命で、ついこちらも肩
入れしたくなってしまう」

沢辺「(苦笑いして) まあな」

菅沼「きつと新島君なら、外国へ行っても、
周りの人々の協力を得て、道を切り開い
ていけるんじゃないでしょうか」

沢辺、小さくうなずく。

沢辺「けれど、問題はその前じゃき。どう
やって出国させるかのう」

菅沼「しかし、沢辺さんが外国船につてが

あるとは、意外でしたよ」

沢辺「はあ？ わしにそんなもの、あるわけなからうが」

菅沼「えっ！ だって、この間そう言ったじゃありませんか」

沢辺「そういう男を一人、知っちよるだけぜよ」

菅沼「そういうって……。つまり、外国人に知り合いが多くて、船の都合がつけられる人物……？」

沢辺「しかも、口が堅くて、肚の据わった男じゃないといかん」

菅沼「……もしかして、卯之さん、ですか？」

沢辺「まあ、卯之吉しかおらんじゃろ」

菅沼「ちよつと待ってください。卯之さんに、いきなりこんな危険な仕事を頼むつもり

ですか？」

沢辺「そこなんじゃのう」

沢辺、頭をかく。

菅沼、ため息をついて立ち上がる。

菅沼「事は慎重に運ばねばなりません。関わる人間は極力少ないほうがいい。もう少し考えてみましょう。では」

沢辺「おう」

菅沼、去っていく。

沢辺、懐から新島の聖書を取り出し、そつとめくる。

○ロシア領事館・玄関先

卯之吉が風呂敷包みを抱えて立っている。新島が現れる。

新島「卯之吉さん！」

卯之吉「遅くなりました」

新島「いつお戻りに？」

卯之吉「実は、とっくに帰っていたんですが、宿に行ったら、新島さんはもういない、行き先も知らんと言われました」

新島「おかしいな。ちゃんとこと言づつてたはずなのに」

卯之吉「まあ、外国人と関わるのを嫌がる人も、まだまだ多いですから。新島さんのせいじゃありません」

新島「すみません。でも、よく来てくれました」

卯之吉「だって、約束ですから」

新島、笑顔になる。

○同・食堂・中

新島と卯之吉が座っている。

卯之吉、自分の帳面を見せる。片仮名で単語がびっしり書いてある。

卯之吉「最初は耳学問でした。外国人と見るや、つかまえて、身振り手振りことで単語を教わって」

卯之吉、自分の顔を触りながら、

卯之吉「目はアイ、鼻はノウズ、口はマウス、耳はイヤ。と、こうやって一つ一つ書き留めたんです。字引きなんて、ないですから」

卯之吉、別の帳面を開く。今度はアルファベットの単語が並ぶ。

卯之吉「あちらにも文字があるってんで、その後ようやくABCを習いました」

新島「へえ……」

新島、帳面に見入る。

卯之吉「でも一番厄介なのは、発音です。

口の開き方、舌の上げ下げ。外国人の傍らで、じつと観察しましたよ」

新島「私も、発音には苦勞します。そうだ、

これはどう読みますか？」

新島、自分の英語の本を開いて見せる。

卯之吉「ああ、これは……」

× × ×

新島、卯之吉からあれこれと教わっ

ている。二人とも笑顔。

× × ×

テーブルの上は、卯之吉の帳面で埋め尽くされている。どれにも、英単語や英文がびっしりと記されている。

新島「すごいな……。卯之吉さんは、どうしてここまで？」

卯之吉「実はあつしは、もともと船大工だったんですよ」

新島「船大工？」

卯之吉「はい。十年前にペルリがやってきた時は、度肝を抜かれました」

○（回想）港

卯之吉（16）と父親（続豊治）が、沖を見つめたまま、立ちすくんでい

る。

卯之吉の声「それまでは、小さな和船しか知りませんでしたから」

○(回想) 沖合

黒船が泊まっている。その堂々とした姿。

卯之吉の声「あの黒船は、一体どんな造りになっているんだろう。どうしても知りたくてね。船に近づくなつていうお触れに背いて、棟梁だった親父と一緒に、すぐそばまで見に行つたんです」

卯之吉と豊治が黒船をめざし、小舟を漕ぎ出す。

○(回想) 港

卯之吉と豊治が、役人に引つ立てられていく。

卯之吉の声「結局見つかつて、お縄になつちまいました。でも、時のお奉行様が開明的なお方で、無罪放免どころか、異国から造船術を学べつて後押ししてくれたんです」

× × ×

卯之吉が、外国人の水夫たちに話しかけている。

卯之吉の声「それには、どうしても英語が必要でした。つまりあつしは、新しい船を作るために、ひたすら英語を覚えたつ

てわけです」

卯之吉、熱心に帳面に書き込んでい
る。

○（回想）「箱館丸」

大きな西洋式帆船。

卯之吉の声「あっしが翻訳した技術を、親
父が形にする。そうやってとうとう、本
当に西洋式の帆船を造ることができまし
た」

○もとの食堂・中

新島と卯之吉。

新島「卯之吉さん……。私は、あなたによ
うなすごい人に会うのは初めてです」

卯之吉「とんでもない。好きでやってるだ

けです。……あっしも、新島さんみたい
な人は初めてですよ」

新島「え？」

卯之吉「大工あがりの商人あきんどに、お侍が教え
を乞いたいと頭を下げるなんて」

新島、気色ばんで、

新島「身分の上下なんて関係あるものです
か！ この国の最も悪しき風習です。ア
メリカには、そんなものはありません。
アメリカでは、自分たちの代表だって、
自分たちで決めるんですよ」

卯之吉「……」

新島「卯之吉さん、実は私は……」

新島、はつとして口をつぐむ。

沢辺の声「勝手に動くなや。絶対に他言無
用じゃ！」

卯之吉「どうかしましたか？」

新島「いえ、何でもありません」

卯之吉「じゃあ、今日はこれで」

卯之吉、帳面を片付け始める。

新島「えっ、もうお帰りですか？」

卯之吉「これから雨になりそうなんで」

新島、窓の外を見る。まだ空は明るい。

いぶかしげな新島。

卯之吉「何となく、わかるんですよ。空と

海と風を、ずっと見てきましたから」

卯之吉、もう一つ小さな帳面を取り

出し、新島に見せる。

卯之吉「これは天候の記録です。どうも天

気には一定の決まりがあるような気がし

て、英語の勉強の傍ら、書き留めています」

細かい記録がびっしり。

感に堪えぬ様子の新島。

○ロシア領事館・外（夕）

パラパラと雨が落ちてくる。

○同・新島の部屋・中（夜）

新島、窓の外を眺めている。外は雨。

○同・食堂・中

新島、ニコライに『古事記』の講義
をしている。

× × ×

新島、一人で英語の勉強をしている。

○同・玄関先（夕）

雨上がり。

神明社の下男が、新島に手紙を渡している。

新島「沢辺さんから？　ありがとうございます」

下男、一礼して去る。

新島、手紙を読み始める。次第に目を輝かせる。

新島、顔を上げて外へと駆け出す。

○通り（夕）

日が差してきている。

新島、晴れやかな顔で、手紙を握りしめたまま駆けていく。

沢辺の声「居留地の『ポーター商会』いう

店に、卯之吉いう者がおる。例の件、卯

之吉なら何ぞ知恵を出してくれるかも知

れん。けんど、わしからはよう頼めん。

七五三太が直接、卯之吉に話してみい。ただし、断られても文句はなしぜよ」

空に虹がかかる。

○ポーター商会・外観（夕）

西洋風の建物。「Porter & Co.」と

う看板がある。

新島が駆けてくる。

○同・ロビー・中（夕）

卯之吉が一人、机に向かって事務仕事をしている。

外の扉が開き、新島が入ってくる。

新島「ごめんください！」

卯之吉「新島さん」

卯之吉、立ち上がる。

新島「あの、あの……」

新島、息をきらしている。

卯之吉「……ちょっと待っててください。ち

ょうど、店を閉めるところでした」

卯之吉、急ぎ扉の鍵をかけ、カーテ

ンを閉めて、灯りをつける。

卯之吉「どうぞ」

卯之吉、椅子を勧める。

新島は立ったまま。

新島「卯之吉さん。私は、外国へ行って学

びたいと思っています」

卯之吉「！」

新島「どうか、卯之吉さんの力で、私を外

国船に乗せてもらえないでしょうか」

卯之吉「……」

新島「お願いします！」

新島、頭を下げる。

卯之吉、ほほ笑む。

卯之吉「いいですよ。あつしでよけりや」

新島「えっ？ い、いいんですか？」

卯之吉「はい」

新島「でも、私には金がありません」

卯之吉「そうですね」

新島「だから、ろくにお礼もできません」

卯之吉「そんなもの要りません」

新島「密航ですよ。いいんですか？ そんな、

すぐに賛成してしまつて」

卯之吉、笑う。

卯之吉「自分から頼んでおいて、おかしな

お人だな」

新島「だって、卯之吉さんはどうして反対

しないんですか？」

卯之吉「どうしてって……。新島さんが、

行きたいと言ったからです」

新島「え？」

卯之吉「伊達や酔狂で言ってるんじゃない

ってことは、あなたの目を見ればわかり

ます」

卯之吉、新島を椅子に座らせる。

卯之吉「何かあるとは思ってました。あつ

しは嬉しいです。こんな大事なことを、

会ったばかりの、あつしのような者に話

してくれて。頼ってくれて」

新島「卯之吉さん……。ありがとう！」

新島、また頭を下げる。

卯之吉「頭を上げてください」

卯之吉、机から綴じ込み帳を取り出

し、めくり始める。

卯之吉「早速、めぼしい船をあたってみます。

新島さんが行きたいのは、アメリカでし

よう？」

新島「(驚いて) どうしてそれを？」

卯之吉「随分アメリカを買っているようだ

ったから。そうだな……。三日ほど待つ

てもらえますか」

新島「えっ、たったの三日？」

卯之吉「善は急げです」

ぽかんと口を開けている新島。

○ポーター商会・外観

テロップ「三日後」。

○同・応接室・中

卯之吉が、新島にセイヴォリー船長を引き合わせている。

卯之吉「こちらがアメリカ船、ベルリン号のセイヴォリー船長です」

セイヴォリー「Nice to meet you」

新島「Nice to meet you, too」

新島とセイヴォリー、握手を交わす。

卯之吉「ベルリン号が向かうのは、上海です。

上海からは、別のアメリカ船が乗せてくれるそうです」

セイヴォリーが何やら英語で話す。

卯之吉「船長は、新島さんの熱意に打たれて、協力することにしたと仰っています」

新島、目を輝かせ、

新島「Thank you so much」

セイヴォリー、卯之吉に向かい、

セイヴォリー「(英語で)そして何より、危険を顧みず、友人を助けたいというあなたの心意気に感じ入ったからです」

卯之吉、ほほ笑む。

新島「船長は何と？」

卯之吉「いえ。……いい船旅になるだろうと」

卯之吉、地図を広げる。

卯之吉「計画をお話しします」

○料理屋「筆屋」・外観(夜)

○同・個室・中(夜)

新島、菅沼、沢辺、卯之吉が、膳をのけて、箱館中心部の地図を囲んでいる。

卯之吉「乗船は四日後。六月十四日です」

沢辺「十四日？ わしんとこの夏祭り当日じゃないかえ」

卯之吉「だからいいんです。夜に出歩いてても、怪しまれない。灯りもつくし、人出に紛れ込める」

菅沼「確か、翌十五日は、奉行所が五稜郭へ引つ越す日です。ひよつとしたら、その準備に追われて、港の警備は手薄になるかも知れない」

沢辺「なるほど！」

卯之吉、地図を指しながら、

卯之吉「新島さんは、夜五つ半（午後九時）

頃には領事館を出て、神明社の道場へ、あらかじめ預けておいた荷物を取りに行きます。それから東坂を下りて、居留地

のポーター商会へ。ここであつしと落ち

合いましょう。あつしはこの船着き場から小舟を出して、新島さんをベルリン号までお運びします」

沢辺「よし、頼むぜよ、卯之吉！」

卯之吉、うなづく。

卯之吉「新島さんは、なるべく目立たぬよう、できれば町人姿で。腰の大小（刀）も外してください」

新島「心得ました」

卯之吉「あとは天気がいいことを願うばかりです」

菅沼「卯之さんの見立ては？」

卯之吉「まだ確かなことは言えませんが、おそらく良好。ベルリン号は、十五日朝には出航です」

沢辺「よっしゃ！」

おときの声「失礼しまーす」

卯之吉、すばやく地図をしまう。

おときが、徳利と大鉢とくくりを載せたお盆を運んでくる。

皆、慌てて膳を戻す。

卯之吉「なんだ、呼んでもないのに」

おとき「旦那さんがね、武田塾の皆さんに

はお世話になったから、どうぞって」

おときが各膳に徳利を一つずつつける。

菅沼「これはかたじけない」

沢辺「(大げさに)寂しいのう。菅沼だけじ

やのうて、七五三太まで江戸に帰ってし

まうとはのう」

菅沼「(ぎこちなく)新島君。江戸へ帰っても、

元気で」

新島「はい。皆さん、二か月足らずの短い

間でしたが、お世話になりました」

沢辺「二人の送別の宴じゃき。パーツとやろうじゃないかえ」

おとき「じゃあ、これは私から」

おとき、大鉢にかけてあるふきんをとる。ふつくらした白パンである。

おとき「味見してみてください」

卯之吉「今？」

おとき「今しかないでしょ」

四人、一つずつとって、食べる。

菅沼「うん、まあまあかな」

おとき「よかった！」

沢辺「(小声で)まあ、この間よりは……」

新島「あ！これ、ジャムをつけたらどう

でしょうか？」

おとき「じゃ…じゃむ？」

新島「はい。甘くて、とろりとした…、

ニコライさんがよく召し上がります。そ

うだ、ニコライさんに作り方を教わって

は？ 私が伝えておきます」

おとき「へえー。ありがとうございます。

ぜひ」

沢辺、無然としている。

おとき「じゃあ、ごゆっくり」

おとき、出ていく。

四人、また顔をつき合わせて、

卯之吉「そう、密航の件、ニコライさんに

はどう説明します？」

菅沼「じゃあ、それは私が何とかします」

卯之吉「お願いします」

菅沼「あとはもういいかな、新島君」

新島「はい。皆さん、本当に何とお礼を言

つたらいいか…。私は、この箱館に来て、

本当によかった。このご恩は…決して

……」

新島、言葉に詰まる。

沢辺「何言うがじゃ。これからがおおごと

ぜよ。パンだか何だか知らんけんど、ア

メリカ人は、こいつと四つ足しか食わん

のじゃろう？ 今のうちに、たんと美味

いもんを食うちよけ！」

沢辺、尾頭付きの魚を新島の前に置

く。

新島「はい！」

○料理屋「筆屋」・外観（夜）

賑やかな笑い声が聞こえている。

○通り（夜）

菅沼と卯之吉が歩いている。

卯之吉「沢辺さん、だいぶ酔っていましたね」

菅沼「新島君が送ってくれるそうだから、

大丈夫でしょう。それより……」

菅沼、足を止める。

菅沼「卯之さん、本当にいいののか？」

卯之吉「何がです？」

菅沼「もし、しくじったら……。私はすぐ

に国元へ発つし、沢辺さんは知らぬ存ぜ

ぬで通せるかも知れない。しかし、舟を

出すとあっては、卯之さんは言い逃れが

できないぞ」

卯之吉「確かに、あつしは一度お縄になっ

ていますからね。でも、もうへまはしま

せん。任せてください」

菅沼「いや、疑っているんじゃない」

卯之吉「わかってますよ」

菅沼「すまない。卯之さんにしたら、会っ

て間もない新島君のために、ここまでし

てもらって」

卯之吉「それが妙なんです、新島さんとは、

ずっと前からの知り合いだったような気

がしちまうんですよ」

卯之吉、空を見上げる。満天の星。

卯之吉「新島さんは、外国へ行くべき人です。

うまく言えませんが、何か特別なお役目

がある人のように思えます。そして、そ

の新島さんを何としても外国へ行かせる。

それが、あつしの役目なんじゃねえかと

卯之吉、菅沼に向き直る。

卯之吉「きつと、うまくいきます」

菅沼「……ありがとう、卯之さん」

二人、また歩き出す。

菅沼「ただ、おときを巻き込まないように

だけ、頼む」

卯之吉「はい」

並んで去っていく二人の後ろ姿。

○ポーター商会・外観

○同・ロビー・中

客の姿はない。

卯之吉が机に向かっている。

おときがその周りをうろうろしてい

る。

おとき「怪しいんだなあ」

卯之吉「何が？」

おとき「菅沼さんも沢辺さんも新島さんも、

益々様子がおかしかったでしょう？」

卯之吉「そうか？」

おとき、右から左から、卯之吉の顔

を覗き込む。

卯之吉、全く動じない。

おとき「だめだ。兄ちゃんは読めない。い

つつも何考えてるかわかんないんだもん」

卯之吉「俺は何も知らん。おまえ、こんな

ところで油を売っていいのか？」

おとき「夕方まではお店も暇だもん」

卯之吉「じゃあ、茶でも淹れてくれ」

おとき「はい」

おとき、奥に向かう。振り返って、

おとき「何だか知らないけど、面倒なことに菅沼さんを巻き込まないでよ、ね」

おとき、奥に消える。

卯之吉、くすつと笑う。

× × ×

おとき、卯之吉の前に湯気のたった

カップを置く。

おとき「どうぞ」

卯之吉「何だ、これ？」

おとき「レモネードっていうの」

卯之吉、一口すすする。

卯之吉「お！」

おとき「美味しいでしょ。それに、これ飲

むとね、気持ちが落ち着くんだった」

卯之吉「へえ……。レモネードか」

卯之吉、もう一口。

卯之吉「これ、どうやって作る？」

○ロシア領事館・中庭

菅沼とニコライが何やら話している。

菅沼、ニコライに深々と頭を下げる。

○同・食堂・中

新島が英語の勉強をしている。

ニコライが入ってくる。

ニコライ「新島サン、フォトガラ、撮りま

せんか？」

新島「フォトガラ？」

○同・中庭

直立不動の新島。表情も硬い。

外国人の写真技師が、新島にカメラを向けている。

ニコライ「新島サン、少しの間、じっとしていてください」

新島の顔が一層ひきつる。

× × ×

新島とニコライが話している。

ニコライ「フォトガラは、今日中に、できるそうです」

新島「はい。でもどうして……」

ニコライ「江戸のご両親に、送ってあげなさい」

新島「えっ」

ニコライ「それから、私は、明日からしばらく、留守にします。Summer vacationです」

新島「避暑に行かれるんですか？」

ニコライ「はい。ですから、もし私が留守の間に、何か起こっても、私は知らない。すべて、あなたに任せます」

新島「ニコライさん……」

ニコライ「菅沼さんに、よい避暑地を、紹介してもらいました」

新島「ありがとうございます……」

ニコライ「お礼なら、菅沼さんに」

新島「お世話になりました」

新島、頭を下げる。

ニコライ「あなたに、神のご加護が、あり

ますように」

ニコライ、ほほ笑む。

○同・境内

沢辺、正装で本殿に向かってる。

○同・新島の部屋・中（夜）

新島、机に向かい、手紙を書いている。

そばには、真新しい新島の写真。

○箱館奉行所旧館・前

菅沼が通りかかる。

役人が引越し準備で忙しく行き来している。

○箱館港

ふだんと変わらぬ賑わい。

テロップ「六月十四日（新暦七月十七日）」

○沖合

卯之吉が小舟を漕いでいる。

その先に外国船の姿。

卯之吉、額の汗をぬぐう。

卯之吉「よし。……いい風だ」

○神明社・外

「祭礼」の幟のぼりが出ている。

参道の脇には露店が立ち始めている。

○ロシア領事館・新島の部屋・中

町人鬘に結った新島。大小の刀を風

呂敷に包む。

○神社・外（夜）

露店が並び、大勢の人で賑わっている。

菅沼「君は、千里を馳すと言った。その志があるなら、窮屈な籠の中にいてはいけない。君は羽ばたいていける人です。大丈夫！」

新島、菅沼を見て、力強くうなづく。

震えは止まっている。

沢辺が入ってくる。

沢辺「いやあ、待たせてすまん。やっと抜

けられた」

沢辺は白衣に袴姿。

新島「沢辺さん……。本当に宮司だったん

ですな」

沢辺「当たり前じゃ！」

菅沼「では、新島君」

菅沼、新島に盃を手渡す。

菅沼「これは水盃じゃない。本物の酒ですよ。

菅沼「沢辺さん、遅いな」
新島「……」

緊張した面持ちの新島。少し手が震えている。

菅沼、新島の肩にそっと手を置く。

菅沼「もし翼があったら……。と話したこと、

覚えていますか？」

新島「はい」

今生の別れではありませんから。アメリカで学問を修めたら、君は必ず日本へ帰ってきてください」

新島「菅沼さん……」

菅沼、酒を注ぐ。

菅沼「さあ」

新島、飲み干す。

沢辺「そうじゃ、大事なものを返さんと」

沢辺、棚から包みを取り出し、開く。

新島の漢訳聖書である。

沢辺「向こうじゃ、この本も、堂々とお天道様の下で読めるんじゃないろう？ もう、目を患う心配もないのう」

新島「はい。ありがとうございます」

新島、大事そうに聖書を荷物に入れる。

新島「これ……」

新島、驚いて受け取る新島。

菅沼「では、そろそろ」

沢辺「この辺りは立入禁止にしちよるき、裏口から出るぜよ」

○同・裏門（夜）

荷を背負った新島と、菅沼、沢辺が立っている。

菅沼「私たちはここで」

新島「はい。お世話になりました。お元気で」

菅沼「新島君も。成功を祈ります」

新島、歩き出す。

沢辺「七五三太！」

新島、振り向く。

沢辺、財布を投げてよこす。

新島「これ……」

新島「これ……」

沢辺「昆布でも買え」

沢辺、背を向けて歩き出し、後ろ姿のまま小さく手を振る。

菅沼、うなづく。

新島、財布を抱えて深々とお辞儀をし、足早に歩きだす。

○東坂（夜）

家々の軒先には、祭り提灯が灯っている。

新島が足早に歩いていく。

新島に目をとめる者はいない。

○居留地の通り（夜）

新島が歩いていく。

この辺りは人通りがない。

新島の雪駄の音が響く。

新島、はっとして、抜き足差し足で歩くが、やはりうるさい。

どこかで犬が吠える声。

ぎくりとする新島。慌てて雪駄を脱ぎ捨て、足袋裸足で歩き出す。

○ポーター商会・ロビー・中（夜）

卯之吉が扉を開ける。

新島が入ってくる。

卯之吉、注意深く辺りを確かめ、扉を閉める。

卯之吉、新島の足元を見て、

卯之吉「どうしました？」

新島「雪駄の音があんまり響くので、脱ぎました」

卯之吉「脱いだ雪駄は？」

新島「荷物になるので、居留地の入口あたりで捨ててきました」

卯之吉「……探してきます」

卯之吉、扉を開ける。

新島「いや、もういいんです」

卯之吉「よくありません。どんな遺留品も

残しちゃ危ない」

新島「そうか、しまった……」

卯之吉、飛び出していく。

○同・応接室・中（夜）

恐縮して座っている新島。

卯之吉がカップを運んでくる。

新島「考えが足らず、すみませんでした」

卯之吉「もういいですよ。すぐに見つかり

ましたから」

新島の荷物の脇に、雪駄が並んでいる。

卯之吉「どうぞ」

レモネードである。

新島、一口すすする。

新島「あ、うまい」

卯之吉、ほほ笑む。

卯之吉「船長との約束の九ツ（午前0時）

までには、まだ間があります。少し休んで、

気持ちを落ち着けましょう」

新島「はい」

卯之吉「飲みながら聞いてください。外へ

出たら、もう一切口をきかないように。

それから、窮屈ですが、舟の中では、ず

っと伏したまままでお願いします」

新島「はい」

× × ×

卯之吉「あつしは昼間、試しに舟を漕いで
みました。昼と夜とじゃ、風向きや潮の
流れが違います。まあ何とかベルリン
号まで辿り着けそうです」

小舟の中、ござの上に横たわる新島。
卯之吉、うなずいて、上からそつと
帆布をかける。

新島「よろしくお願いします」

新島、立ち上がる。

× × ×

新島「行きましよう」

卯之吉、もやいを解いている。

○船着き場（夜）

役人の声「何をしておる？」

新島と卯之吉が歩いてくる。

卯之吉、振り向く。

新島、町のほうを振り返る。
祭礼の灯りが見えている。

少し離れたところで、役人が不安げ
にこちらを窺っている。

新島「……」

卯之吉、丁寧にお辞儀をする。

新島、遠い灯りに向かい、頭を下げる。

卯之吉「これはどうも。お役目ご苦労様です。

あつしはポーター商会の卯之吉でござい

ます」

役人「ああ、何だ、卯之吉か」

役人、ほっとした様子。

卯之吉「これから、アメリカ船のベルリン

号へ参るところです」

役人「こんな夜中にか？」

卯之吉「はい。どうしても明日まで引き延

ばせない商用があるっていうんで、呼び

出されまして」

役人、舟のほうに灯りを向ける。

荷に帆布がかけられている。

○帆布の下

汗びっしよりの新島。

○船着き場(夜)

役人「まあ、お前なら、荷をあらためるに

も及ぶまい。異人相手の商売も骨折りに

やのう。気をつけて行けよ」

卯之吉「ありがとうございます。じゃあ、

失礼します」

卯之吉、舟を漕ぎだす。

役人、去っていく。

ゆつくりと進んでいく舟。

卯之吉、ほーっと大きなため息をつ

く。

○帆布の下

新島、安堵の表情で目を閉じる。

○沖合（夜）

ベルリン号が泊まっている。

新島、上体を起こし、汗をぬぐう。

目の前にベルリン号の姿。

新島「ああ……」

新島、目を輝かせる。

○ベルリン号・甲板（夜）

セイヴォリー船長と複数の船員の姿。

卯之吉、舟を寄せ、新島を促す。

セイヴォリー、懐中時計を見る。

新島「卯之吉さん……」

船員、双眼鏡を覗く。

卯之吉、しつと指を立てる。

○沖合（夜）

一艘の小舟が近づいてくる。

言わせてください」

新島、卯之吉の手をとり、しっかりと握る。

○ベルリン号・甲板（夜）

セイヴォリー「（英語で）はしごを下ろせ！」

新島「本当にありがとう。あなたのことは、決して忘れません」

決して忘れません」

○小舟・中（夜）

卯之吉、帆布をとる。

新島、立ち上がる。

新島「きつと、また会いましょう。……」

Good bye」

卯之吉「……」

新島、縄ばしごに手をかける。

卯之吉「新島さん！」

新島、振り向く。

卯之吉「Good bye. See you again」

新島、笑顔でうなづく。

○ベルリン号・甲板（夜）

新島、セイヴオリー船長らに迎えられて
いる。

○小舟・中（夜）

ベルリン号を見上げている卯之吉。

卯之吉、向きを変え、静かに舟を漕
ぎ出す。

○箱館港

旅姿の菅沼と、沢辺が並んで立ち、
海を眺めている。

菅沼「新島君は、今どの辺りでしょうね」

沢辺「さあな。何事も、天の父の御心のま

まじゃき」

菅沼「……沢辺さん、変わりましたね」

沢辺「知らん。おまんは他人ひとのことより、

自分のことを心配せんかえ。長岡に帰っ

たら、もう厄介ごとには関わるなや」

菅沼「はい。……でも、楽しかったですね」

沢辺、くすつと笑って、

沢辺「まあな」

菅沼「……では、お元気で」

沢辺「……菅沼も、達者でな」

菅沼と沢辺、握手を交わす。

二人、それぞれ歩き出す。

× × ×

菅沼の姿。

テロップ「菅沼精一郎。その後の消息は不明。

四年後の戊辰戦争で、長岡藩は激戦地の一つとなった。」

× × ×

沢辺の姿。

テロップ「沢辺数馬。のちの沢辺琢磨。四

年後、ニコライより極秘で洗礼を受け、日本初のハリストス正教会の信者となった。」

× × ×

少し離れた場所で、卯之吉が何やら帳面に書き込んでいる。ふだんと変わらず、淡々とした様子。

新島の声「卯之吉さん、ご機嫌いかがですか。

私は無事に、上海へ着きました。あなたにお礼を言います。菅沼さんと沢辺さんにごどうぞよろしく。また、沢辺さんには、昆布一束は一ドルだったとお伝えくださ
い」

卯之吉の姿。

テロップ「福士卯之吉。のちの福士成豊。

明治期には開拓使に出仕。函館に日本初の官立気象台を設けた。」

○現在の金森倉庫群

「日本最初の気候測量所跡」の看板。

テイラー「Shi, me, ta? (英語で) 発音しにくいな。そうだ、今日からは君を、ジョーと呼ぶことにしよう」

○ワイルド・ローヴァー号・外観

大きな帆船。

新島「ジョー?」

テイラー「Yes. You are Joe. O.K.?»

新島「Joe……」

新島の声「セイヴォリー船長が、ワイルド・

ローヴァー号のテイラー船長を紹介して

くれました。ここからは、ワイルド・ロ

ーヴァー号に乗り換え、いよいよアメリ

カへ向かいます」

○同・船室・中

狭い質素な部屋。新島がペンで手紙を書いている。

新島の声「いつかまたお会いしましょう。

卯之吉様へ。新島七五三太あらため新島

襄」

○同・船長室・中

テイラー船長が座っている。その向かいに新島が立っている。

新島、手紙の最後に「Joe」とサイン

テイラー「What's your name?»

をする。

新島「My name is Shimeta Nijima」

○現在の「新島襄海外渡航の地碑」

函館港を背に立つ記念碑。

「新島襄 海外渡航 乗船之處」と碑

文が見える。

青い空が広がる。

〈完〉

本電子書籍は、2020年12月5日発行の『第26回函館港イルミネーション映画祭2020第24回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第26回函館港イルミネーション映画祭2020

第24回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

ジョー
JOE 一千里を馳すー
は

作：石村 えりこ

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2021年4月20日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
